

—探求・川にちなんだ万葉集の歌—

万葉の川心 第31回

横浜市立綱島小学校教諭 澤井 園子

(紀朝臣と)同じく鹿人の、泊瀬川の辺に至りて作れる歌(巻第六 九九一番歌)

石走り 激ち流るる泊瀬川

絶ゆることなくまたも来て見む

この地に来て二度目の春が来た。桜の好きな義母の言っ

「この通りの桜並木を見ていたら、どこにもお花見なんか行かなくていいの。通り一面に桜のトンネルが続いている。強い風が容赦なく花を散らし、雨のように降ってくる。次から次へと止めどなく散る桜の中において、昔見た映画を思い出した。」

「死ぬときは桜の頃がいい。桜の散る中みに見送られ、静かに煙が立ち上るのがいい。」

そんなせりふだったろうか。そのときは、よくわからなかった。「死」という言葉の入り込む隙がないほど若かった。幼すぎて「死」を受け止めきれなかったし怖かった。でも今、桜の下において、ふと自分の散り際を思った。怖いとか悲しいという感情を込めないで、当たり前な自然なものとして静かに想った。あの頃より確実に歳をとったのだ。そしてまた、生きている「今」を感じている。歳を重ねることは悪くない。来年はどんな想いで桜を見上げるのだろう。そして、あなたは今、どんな春を迎えているのだろうか。

「岩の上をほとばしって流れる泊瀬川。絶え間なくまた来ては見よう、この美しい景色を」これは、川の流れが変わらぬように、何度でもこのすばらしい土地に訪れようと、国を讃えている歌である。万葉集では「また来て見む」や「ま

たかえり見む」といった再びこうしたいというフレーズがよく用いられる。美しい川の流れや景色に驚嘆し、またぜひ来たいと思う心。国を誉め、お仕えして何度でも通いたいという気持ちもある。それを言葉にし、歌に表すことで国の栄えることを祈っている。もう二度と見ることはできないかもしれないと案じる心を詠む場合もある。栄えれば必ず滅びる日も来る。しかし、大切に守られた自然が景色が変わらないうちは、また来たいと思う。また見たいと思う。そしてその人の原風景となり、時代を越えて愛されていくことだろう。その人がどこにいても、どう変わったとしても、また逢いたい、またともに飲みたいと思う人は少ない。少なくともいい。それがかけがえのない出会いとなるから。それこそが人生を豊かにするから そんなふうに生きていきたい。

写真の碑は、奈良県桜井市の桜井東中学校内にある。脇に初瀬川が静かに流れ、野の草花がそこかしこに咲いている。碑はそれを背にして校舎を黙って見守っている。

来年は一緒に見ようねと語りかける。おなかの中の新しい命は、これから訪れるたくさんの新しい出会いを待っている。



奈良県桜井市桜井東中学校にて